
無双の道

司馬昌光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無双の道

【ZPDF】

Z5036A

【作者名】

司馬昌光

【あらすじ】

この作品は完結していません。あくまで練習用に書いたままでです。皆様がどの様に感じ取られるか知りたいです。ご評価してください。どの様にかんじましたか？

兵次郎の胸には、分厚い筋肉が宿っていた。

たくましく、若々しい兵次郎を、七人の男が円を描き、兵次郎を囲つている。

いかにも丈夫そうな兵次郎の腰には、立派な刀がさしてあった。

兵次郎が身に付けている貧相な衣服が、余計に刀を輝かせている。

「あんさんよお、おとなしくその刀さつさと置いていつたらどうだ？」

「痛い目みたくはねえだろうが？」

男の質問に、兵次郎は何も反応しない。まるで、男の声が聞こえてない感じだ。

その兵次郎の態度は当然、彼らの気持ちを煽り立てた。

「わしらは、無駄な殺生は好まない。だがな……。お前の様な生意気な青二才を見ると、わしらはそうは思わないらしい」

七人の男は、兵次郎に引けを取らないがつちりした体格だ。むしろ、背丈は七人の男達の方が大きいと言つてよい。彼らは大男に分類される。

その七人の男達の鋭く危ない視線を浴びている兵次郎に、動搖は感じられない。

「おい、お前ら！ この青二才はこのわし一人で十分だ！ 下がれ！」

七人の男達の中でも最も体格の良い男が怒鳴った。男の威風に恐れ、他の六人の男達は兵次郎を囲つていた円を解いた。この山賊の中でこの男が一番強いらしい。

男の体格を見ても納得できる。この男の体格はずば抜けているのだ。腕の筋肉は盛り上がり、威風凜々としている。

男は兵次郎を見下ろし、鼻で笑つた。

「おい、小僧。最後に言いたい言葉はないか？」

「拙者は無駄な殺生は好みん」

兵次郎が言葉を言い終えた時、大男の鞘から白光が脱した。大男は兵次郎を一刀両断した。一刀両断したつもりだつた。兵次郎を一刀両断したのではなく、大男の刀は虚空を裂いていた。大男は体勢を整えようとしたが、もう遅かつた。

大男の胴と首は離れていた。

山賊達には兵次郎が刀を鞘から抜いたのが見えなかつた。

一瞬の間に親分が負けたのである。一同顔を真つ青にしている。

「拙者は無駄な殺生は好まないと言つたが、しようがなかつた様だ。貴様らが拙者に害を加えるのであれば、拙者の刀はもつと血を吸わなければならぬ」

「でえい！ 野郎共、相手はたかが一人だ！ 六人もいれば勝算はあるぞ！」

山賊達は、兵次郎には勝てない事はわかつてゐる。しかし、六人という人数が山賊達の希望になつてゐる。

しかし、山賊達の希望はことごとく壊された。兵次郎に刀が当たらぬのである。

兵次郎の手に持つてゐる白光が飛ぶ。その白光は山賊達の目では追えない。

数秒間に一人大地に男が倒れる。血を流しながら。

あつと言う間に兵次郎の刀は五人の血を吸つていた。

あとの人一人は、ずる賢く、姿が見えない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5036a/>

無双の道

2010年10月11日18時42分発行